望星 インタビュー Interview

この人の“実感”を聞きたい

大島幹雄さん（サーカスの〝呼び屋〟）

国境なきサーカス団

みずからの感覚を信じて海外のアーティストを見つけ、日本で公演を手がける〝呼び屋〟。早大露文出身の若者は、その醍醐味に魅せられ、それを生涯の仕事とした。日本の、世界の、サーカス事情を聞いた。

バクチみたいなもんです

――呼び屋とはあまり耳にしない職業ですが、どんな仕事なんですか。

一言でいえば、海外からアーティストを呼ぶ仕事。だから呼び屋です。戦後間もない時期にドン・コザック合唱団やボリショイバレエなどを招聘した神彰、小説家の井上靖が『闘牛』で書いたイベントプロデューサーの小谷正一の存在が呼び屋の出発点といわれています。ビートルズ来日公演を成功させ「ビートルズを呼んだ男」として有名なのは永島達司。「カシアス・クレイ（モハメド・アリ）を呼んだ男」は康芳夫。

――有名な呼び屋は「○○を呼んだ男」と呼ばれるわけですね。

ビートルズやモハメド・アリ、マイケル・ジャクソンのような誰もが知るスターを呼ぶのは競争が激しくて興行の規模も大きい。でも、サーカスのアーティストを専門に呼んできたぼくは、そことは無縁だった。

まずアーティストを探すために海外を旅する。そして見つけたアーティストが日本で当たるかどうか自分の才覚で見極める。当たったときは、何物にも代えが

たい快感です。そのぶん、外れたときはホントに怖い。まぁ、バクチみたいなもんです（笑）。

――どんな仕事が印象に残っていますか？

一九八五年に東ドイツから招いた「国立ドイツ動物大サーカス」ですね。象五頭、白熊十七頭、馬二十頭、ライオンやヒョウ、ワニにニシキヘビなど百頭の動物が登場する戦後最大規模の興行でした。ぼくは中央放送エージェンシーという呼び屋会社の関西地区を担当する責任者として、チケット販売、団体客のセールス、会場の交渉、宣伝、保健所や消防署への申請など駆け回りました。

おおしま・みきお　1953年宮城県生まれ。早稲田大学第一文学部露文科卒業。石巻若宮丸漂流民の会事務局長、早稲田大学非常勤講師も務める。著書に『明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか』『虚業成れり「呼び屋」神彰の生涯』『満洲浪漫　長谷川濬が見た夢』『〈サーカス学〉誕生　曲芸・クラウン・動物芸の文化誌』などがある。

大阪市に許可を取り動物たちを大阪城公園の中に置かせてもらって、市民にただで見てもらえるようにしました。市の担当者からは「くれぐれも檻の外に出さないでください」と釘を刺されたのですが、数日後、「公園を散歩していた人から象が歩いているのを見たと連絡がきた」と大変な剣幕で呼び出された。公園に駆けつけるとあちこちに象の糞が落ちていて、調教師に問い質すと、檻の中ではストレスが溜まるから散歩させたという。結局、始末書を書くハメになりました。

けれど、興行が当たれば、そんな苦労は吹っ飛んでしまう。大阪公演ではウソかと思うほど客が入りました。常設のチケット売り場だけでは対応しきれずに、テントを特設チケット売り場にして、タバコが入っていた段ボール箱をお札入れにした。箱にどんどんお札が溜まって、箱を回収して百万円ずつ束ねていくと一千万以上になりました。一日で、ですよ。楽しくて楽しくて、毎晩、北新地で飲みまくっていました。

でも、その後の東京公演でオオコケ。あわや倒産と

いう憂き目でした。面白さと怖さの両方を味わった興行でしたね。

美人ダンサーとの〝再会〟

――どんな経緯で呼び屋になったんですか？

大学院でロシア文学を学ぼうと考えていたのですが、試験に落ちてしまったんです。腰掛けのつもりで、ソ連や東欧からアーティストを呼ぶ中央放送エージェンシーに入社したのが一九七九年の四月。いまでいえばイベントプロデュース会社ですが、当時は「呼び屋」と名乗ったほうが通りがよかった。

最初はイヤでイヤでしょうがなかったですね。会社では社長がいつも机の上に足を乗せ偉そうに電話している。その姿がいかにもヤクザチックでね。ホント胡散臭いな、と。

しかも最初の仕事だったソ連から来た「国立ボリショイ舞台サーカス」のロシア人アーティストの第一印象が最悪だった。とにかく自己中心的でわがまま。彼らが目を輝かせるのは買い物のときだけ。しかも下っ端のぼくが値切り交渉をさせられる。五十人乗りのバスで移動するんだけど、車内で身動きが取れないほど絨毯やテレビを買い込むんです。

――絨毯ですか？

なぜかロシア人は絨毯を買うんです。バスがいっぱいになるとぼくらが絨毯をトラックに積み直さなきゃならない。なんでこんなことやんなきゃいけないんだと、本当にイヤでね。実際、同時期に入社したほかの三人は夜逃げするように辞めてしまった。

初仕事では、生まれ故郷の宮城県石巻市でも公演しました。熊が舞台上でおしっこをすると、ぼくらがモップで掃除しなければならなかった。その姿を、客席にいるオヤジやオフクロには見られたくないから今日だけはやめてくれよ、と祈るような気持ちでした。

けれども、アーティストたちと二ヵ月くらい一緒に過ごし少しずつ印象が変わってきました。サーカスは命がけの仕事なんです。ケガはつきものだし、ひとつ間違えれば、命を落とす危険性がある。ふだんはいい加減でわがままな人たちが、真剣な表情で舞台に立っている。間近に見ていたら胸がキュンとしてきました。

――ギャップにやられたわけですね（笑）。

それに四六時中一緒にいて言葉が少しずつ通じるよ

うになって余裕ができたのも大きかった。早稲田大学の露文科では、ロシア語は読むモノで、しゃべるモノではないという伝統があった。そのせいか、初めは言葉がほとんど通じなかった。ぼくのロシア語の先生はクマだったんですよ。

――クマって、熊ですか？

初めての巡業では熊の調教師のアシスタントもさせられていました。何より大切だったのがエサ。「フレープ（パン）」「マルコーフ（ニンジン）」「カプースタ（キャベツ）」などが、ぼくが初めて話したロシア語でした。熊のおかげでロシア語が話せるようになりました。もう一つ、呼び屋を続けた大きなモチベーションが、イリュージョンのショーに出演するダンサーたち。みんなスタイルが抜群によくて、美人だった。イヤな仕事をする励みになりました。

――わかる気がします。

後日談があるんです。五、六年前、北海道のルスツリゾートの公演で空中アクロバティックを演じるロシア美人が来日しました。三度目の来日で顔見知りのアーティストの一人でした。到着した彼女が一枚の写真を出したんです。三十数年前の初仕事で出会った美人ダンサーと二十代のぼくが写っていた。聞いたら「お母さんの写真だ」と。いかに自分がこの業界で長く生きたか……感慨深かったですね。

「人さらい」から総合エンターテイメントへ

――三十数年前と現在ではサーカスをめぐる状況は大きく変わったのではないですか。

当時、サーカスというと「人さらい」と必ず揶揄されましたからね。サーカスにはそれほど暗いイメージがつきまとっていました。

でも、いまはサーカスといえば「シルク・ドゥ・ソレイユ」のような洗練されたエンターテイメントを連想する人が多いのではないかと思います。シルク・ドゥ・ソレイユがフジテレビの主催で日本で公演を始めたのが二十数年前。フジテレビはＣＭでサーカスという言葉を一切使わなかった。総合エンターテイメントという形で売り出しました。かつての「人さらい」が、いまや総合エンターテイメントですからね。イメージは大きく変わりました。ただショーの内容はほとんど変わっていません。見せ方が変わっただけなんです。

今日（一月十六日）、ショッキングなニュースが入りました。アメリカを代表するサーカス団「リングリング・ブラザーズ・アンド・バーナム・アンド・ベイリー・サーカス」が解散を発表した。約百五十年の歴史を持ち、地上最大のショーと呼ばれたサーカス団でしたが、動物愛護団体から抗議を受け、目玉だった動物ショーを中止せざるをえない状況に追い込まれてしまった。その結果、経営が成り立たなくなってしまったんです。サーカスはなくならないでしょうが、多くの動物を抱えるような拡大路線の経営は難しくなっていくのではないかと思います。

サーカスは、社会の変化とともに形を変えながら今日まで続いてきました。昭和初期、日本には六十から七十のサーカス団がありましたが、現在は「木下サーカス」「ポップサーカス」「ハッピードリームサーカス」の三つだけ。戦後、児童福祉法が成立して子供が舞台に立てなくなり、また映画やテレビなど娯楽が増えてサーカスの需要が減っていったなどの要因がありました。

しかし、サーカスが持つ臨場感が薄れたわけではない。ぼくは「ボリショイサーカス」に知り合いがいるから毎年見に行きますが、会場はいつもいっぱいです。生身の人間が常識を超えたパフォーマンスを見せる。それは新鮮で純粋な驚きだと思うんです。しかもテレビのバラエティ番組のような予定調和のエンターテイメントではない。失敗もあれば、ケガもする。空中ブランコで三回やって三回失敗すれば、アーティストだけじゃなく、観客も落胆する。逆に三回目でやっと成功したら、観客も一気に沸く。ドラマがあるからこそ、親に連れられてきた子供たちも身を乗り出して、目を輝かせて舞台を見ているんです。

サーカスに出る〝お国柄〟

――いまはどんな場所で公演しているんですか。

最近ではほとんどがテーマパークですね。でも、かつては日本でも本格的なショーが見られるレストランがあったんです。

ぼくは一九八八年に中央放送エージェンシーから現在も勤務するアフタークラウディカンパニーに転職しました。当時、千葉県市川市にサーカスレストランがオープンする計画があった。企画を依頼されたアフタ

ークラウディカンパニーからレストランのプロデューサーになってみないか、と誘われたのがきっかけでした。けれども、バブルの崩壊とともにサーカスレストランは潰れました。

いまぼくが関わっているのは、愛知県犬山市のリトルワールドというテーマパークのサーカス公演。去年の秋の三ヵ月はアルゼンチンサーカス、今年の春三ヵ月はウズベキスタンサーカスと、毎回違った国からアーティストを呼んで公演を行なっています。

あと、毎年夏に北海道のルスツリゾート、秋に姫路セントラルパークというテーマパークでもサーカスの定期公演を手がけています。

――アルゼンチンやウズベキスタン、ロシア……。国によって芸風は違うんですか？

ロシアではソ連時代に国がサーカス学校を運営していました。その影響でいまもパフォーマンスが洗練されていてとても美しい。一方、中国は芸の極み、技の極みを追求するようなサーカス。サーカス文化が根づいたヨーロッパは、アットホームなサーカスとでもいえばいいかな。ヨーロッパの中でも、とくにドイツとフランスではどんな小さな町にも年に一度はサーカスが来る。五人家族だけで巡業しているファミリーサーカスもあります。

中南米のチリやアルゼンチン、メキシコもサーカスが盛んで、スピーディーで命知らずな芸が持ち味。珍しいところではモンゴルサーカスで、馬やヤク、ラクダを使う。国が力を入れているベトナムのサーカスは、いまとても勢いがありますね。

こちらが綱渡り

――さまざまな国のアーティストが集まると、食事や慣習など気を遣わなければならないのでは。

いや、そんなことはないですよ。先日、昔から知っているウズベキスタンの連中が台湾で巡業していて、彼らから、「台湾と日本は近いから遊びに来い」と連絡があったので、「近くなんかないよ」と毒づきながら仕方なく会いに行きました。そしてウズベキスタン人やコロンビア人のアーティストと中華料理を食べ、酒を飲んできました。彼らにとってそれが当たり前、食事や慣習なんて、ほとんど気にしない。

逆にこちらが驚かされることがたくさんあります。

二十年以上前、ベトナムのアーティストがロシアンバーという棒を使ったパフォーマンスで、足の靱帯を切る大ケガをしてしまったんです。医者は手術が必要だと診断したんですが、ベトナム人のリーダーは、「手術は絶対にダメだ」と譲らない。「歩けなくなるかもしれないから」と説得するぼくに、「塩水に浸ければ治る」と言う。結局、医師やぼくらの言葉に耳を貸さずに宿舎に帰って、塩水で本当に治してしまった。

身体を極限まで鍛え上げた彼らには、西洋医学の常識とは違う、彼らならではのやり方があるんです。ただこちらは生身の人間を預かっているわけですから、大きな事故が起き、命を落とす事態になったらと思うと、こちらが綱渡りをしている気分です（笑）。

狭いサーカスの世界

最近では、サーカス団としてではなく、それぞれのアーティストをピックアップして呼ぶケースも増えています。ぼくが去年の春、犬山のリトルワールドで担当したヨーロッパサーカス公演では、ハンガリー、ブルガリア、ポーランド各地からアーティストを集めて、三ヵ月だけのチームを作りました。

彼らは興行のたび、出会いと別れを繰り返す。公演が終われば、チームは解散。名残惜しいんだけど、いつかまたどこかで会えると思っている。だから十数年ぶりに再会して同じ舞台に立つ場合もあるんです。

以前、タジキスタンという、日本人がめったに行かない国を訪れたら、かつてキグレサーカスにいたロシア人の熊使いと再会しました。驚いて再会を喜んでいましたが、いつしかそうしたことが当たり前になってきました。アーティストも国境など関係なくサーカスという小さな世界の中を移動しているんです。

――初仕事で出会った美人ダンサーの娘さんと仕事をしたのもサーカスの縁なのかもしれませんね。

それがサーカスに携わる大きな醍醐味の一つ。サーカスの世界は、関係者が“It's a Small World”と呼ぶくらい狭い。インターナショナルだけど本当に小さい。小さな窓だからこそ、面白い出会いがあり、見える世界がある。若いころ、自分がまさかサーカスの呼び屋になるなんて思いもしなかったけど、いまはサーカスとの出合いに感謝しているんですよ。

（構成・山川　徹）